九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

漱石の文学観とイプセン ： 「文芸の哲学的基礎」「創作家の態度」を中心にして

藤本, 晃嗣
近畿大学 ： 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/1901712

出版情報：九大日文. 28, pp.2-17, 2016-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

漱石の文学観とイプセン

――「文芸の哲学的基礎」「創作家の態度」を中心にして――

藤本晃嗣（FUJIMOTO Akitsugu）

一　はじめに

夏目漱石の文学観とヘンリック・イプセン（Henrik Johan Ibsen）[1]との関係については、拙稿「漱石のイプセン受容をめぐって」（「九大日文」平21・3）で漱石のイプセン受容の時期と、イプセンに対する発言をもとにまとめている。漱石のイプセン受容は明治四十年頃を境に二つに分けることができる。留学時代のイプセン受容をもとにした明治四十年以前の漱石のイプセンに関する発言は、主にイプセン作品の「個人性」に注目したものであった。一方、明治四十年以後の発言は、イプセン作品に表現される道徳問題や作品の技巧などに関するものが増えてくる。本稿においては、以前の成果を踏まえ、漱石が自らの文学観をまとまった形で述べた「文芸の哲学的基礎」（「東京朝日新聞」明40・5・4―6・4[2]、以下「基礎」）と「創作家の態度」（「ホトトギス」明41・4、以下「態度」）をもとに、漱石の文学観におけるイプセン受容の影響を考察する。

明治四十年四月の講演をもとにした「基礎」と、明治四十一年二月の講演をもとにした「態度」については、その間が一年足らずしかないものの、従来の研究において『虞美人草』（「東京朝日新聞」明40・6・23―10・29）と『坑夫』（「東京朝日新聞」明41・1・1―4・6）の違いと併せ、この時期における漱石の文学観の変化が指摘されてきた。早い時期の指摘として小宮豊隆（「虞美人草」「坑夫」（『漱石の芸術』岩波書店、昭17・12）が、二作に「思ひ切つた対照」を指摘し、『虞美人草』において、「批評的なものが――社会の批評が、人間の批評が、中心問題を形づくる」のに対して、『坑夫』について「人間の心の動きそのものに対する漱石の関心の深さ」を指摘し、「精神分析」を試みているとする。この小宮の見方は、基本的にその後の研究においても継承されている。

例えば、相原和邦（「「虞美人草」「坑夫」から「三四郎」まで」（「国文学　解釈と教材の研究」昭56・10）は、「『虞美人草』の根本モチーフは「道義」にあ」るのに対し、『坑夫』においては「人間の真相凝視が主要モチーフである」とし、その変遷について「基礎」から「態度」における文学観の変化、つまり「態度」において「「真」をより肯定し重視する立場に転じ」たことがその背景であるとする。そしてそのような流れの中に『三四郎』（「東京朝日新聞」明41・9・1―12・29）を位置づけ、自然主義を批判していた漱石が「後じさりで「真」を容認していく過程のなかで生まれた作品」であると指摘する。

またこの変化を「意識」の問題と絡めて論じたのが重松泰雄（『『文学論』から「文芸の哲学的基礎」「創作家の態度」へ」（内田道雄、久

保田芳太郎編『作品論　夏目漱石』双文社出版、昭51・9）である。重松は、「基礎」から「態度」における変化を、漱石が依拠したとされるウィリアム・ジェイムズ（W.James）の「意識の選択作用説」との関連から「一応にしろ〈自由〉な意識の選択作用を中心に掲げ、しかも、その結果に基づいた「理想」の実現すら可能だと説く「哲学的基礎」の観点と、「自由意思」否定の「揮真文学」を積極的に容認する「創作家の態度」のそれとは、けっして等質なものではない」とする。そこから漱石の「意識」に対する考えが「〈選択作用〉の無条件な是認から、複雑・曖昧な――場合によっては矛盾とも言えるような――限定的容認」へと変化したと指摘し、そのことにより、「自由意志と「理想」強調」の「基礎」の立場から、「「理想」の意義を説かず、「情操文学」とともに、「自由意思」否定の「揮真文学」をも「大切なもの」とする」「態度」の立場へと漱石が移ったと結論づける。そしてこの変化の背景として、「意識」の問題について、「基礎」において基盤となっているジェイムズの『心理学原理』（*The Principles of Psychology* 以下『原理』）の立場から、同じくジェイムズの『宗教的経験の諸相』（*The Varieties of Religious Experience* 以下『諸相』）を改めて受容したことにより、「態度」において自らの考えを一変させたと指摘している。

以上、「基礎」と「態度」の差異について、「真」に対する姿勢の違い、さらにそれが「意識」の問題に基づくものであるとする先行論を概観した。確かに「基礎」では、文芸家の「理想」による「還元的感化」、つまりよりよい生き方を文芸家が教えるということが強調されているのに対し、「態度」では、そのような声高な主張は影をひそめ、「客観的態度」に基づいた人間の観察、社会状態の変化を知らせることが文芸の役割とされており、両者はその結論が大きく異なるものと言える。

しかし、先行論のこのような捉え方に対して、全く疑問がないわけではない。例えば、相原が述べる「「真」を容認していく過程」という点であるが、「基礎」においても漱石は、「真に対する理想」を含む「四種の理想」（「真」、「美」、「善」、「壮」）について、「全て平等な権利を有」すると述べ、すでに「容認」しているとも言える。また、重松の述べる「意識」の問題についても、後で見るように小倉脩三による批判がある。結論的に述べるならば、このような先行論に対して、本稿においては「基礎」と「態度」を連続したものとして捉える見解を示したいと考えている。その上で、「基礎」と「態度」の両者において、漱石のイプセン受容が重要な影響を与えていることを示すこととする。

二　「真」に対する姿勢について

本節においては、両評論の「真」に対する漱石の姿勢を考察する。まず両評論における漱石の述べる「真」の内容を確認する。「基礎」では「真に対する理想」として次のようにある。

即ち物を道具に使つて、知を働かし、其関係を明かにして情の満足を得ると云ふ理想であります。此理想を真に対す

る理想と云ひます。（中略）さうして此真のあらはし方、即ち知を働かす具合も分化して色々になりますが、重に人間の精神作用が（中略）、あらかじめ吾人の予想した因果律と一致するか、又は此因果律に一歩の分化を加へたる新意義に応じて発展する場合に多く用ひられるのであります。（第十二回）

ここで漱石は「真に対する理想」として、物の関係を「知を働かし」て明らかにするもの、特に自分たちの予想した「因果律」と一致するか、もしくはそれにさらに発展を加えたものとして説明している。

一方、「創作家の態度」においては、「客観的態度」として次のように説明する。

客観的態度の三叙述を通じて考へて見ますと、何れも非我の世界に於ける（中略）ある関係を明かにする用を務めて居ります。知識を与ふるのが主になつて居ります。だからして一言にして云ふと真を発揮するのが本職であります。（211頁[3]）

ここでは「客観的態度」が、「ある関係を明らかにする」もの、「知識を与ふる」ものとして把握されている。そして、このように物の関係を明らかにし、知識を得ることを漱石は「はあ成程」と表現し、「このはあ成程丈で一篇の小説が出来ます」とした上で次のように述べる。

是（はあ成程―藤本注）は客観的関係を明めるにつけて出るので、似る、移る、因が果になる等の事実を認めて感心した時の話であつて、既に明らめられたる客観的関係を味ふのとは方向が違ふのであります。（212頁）

ここでも漱石は「客観的態度」による描写を、因果関係と結びつけて、それが認められるとき、「小説」になると述べている。「基礎」と「態度」の「真」に対する認識は、基本的に変化がないと考えられる。ただし、「基礎」では認められていた「あらかじめ吾人の予想した因果律と一致する」という「真」の描き方に対して、「態度」では「既に明らめられたる客観的関係を味ふのとは方向が違ふ」というように、低い評価が与えられており、新しい「客観的関係を明める」ことに重点が置かれていることには注意しておきたい。

それでは、次にそれぞれの「真」に対する姿勢についてである。「基礎」においては、次のように当時の日本における「真」の偏重を「病的現象」と批判している。

此故に此等四種の理想は、互に平等な権利を有して、相冒すべからざる標準であります。（中略）然しながら、一の理想をあらはすときに、他の理想を欠いて居る場合と、積極的に他の理想を打ち崩して居る場合とは少々違ふのであります。欠いて居るのは只含んで居らんと云ふ迄で、打ち壊すとなると明かに其理想に違背して居るのですからして、此場合には作家の標準にした理想が、凡ての他を忘却せしめ得る程な手際でうまく作物にあらはれて居らねばならん。（中略）だから如何な長所があつても、此長所を傷ける短所があつて、此短所を忘れ得せしむる丈に長所が卓然としてゐない作物は、惜しいけれども文句がつきます。私は

とくに惜しいけれどもと云ひたい。惜しいと云ふのは、既に長所を認めた上の批評であり、且短所をも知り抜いた上の判断で、一本調子に搦手ばかり、五年も六年も突ついて居る陣笠連とは歩調を一にしたくないからかう云ふのであります。（第十五回）

ここで漱石は、「四種の理想は全て平等な権利を有」すということが前提であり、本来「真に対する理想」もその中の一つに過ぎないことを述べる。しかし、今日の日本では「真」があまりに重んぜられる結果、「真」を表さなければいけない、「真」を表せば何を書いてもいいという状況になってきていることを批判している。漱石は「真」を表すことが、「凡ての他を忘却せしめ得る程な手際でうまく作物にあらはれて居」ればそれでもいいが、現在の文芸はその水準に至っていないことを述べる。このように「真」のみを強調し、他の「理想」を打ち壊すことを、「真に対する理想の偏重」とし、「病的現象」であると批判するのである。

一方、「態度」においても、当時の「真」を描く文学に対する批判が存在する。それは次のようなものである。

真を描く文学は、真を究めさへすればよろしいとなる。其結果他の情操と衝突しても、まあ好いとする。――読者の方では好いとしないかも知れませんが――然しながら真は取捨なき事相であります。公平の叙述であります。好悪の念を離れたる描写であります。従つて褒貶の私意を寓しては自家撞着の窮地に陥いります。ことに作以外の実際に於て、約束的にせよ善に与し悪を忌み、美を愛し、醜を嫌ふものが、単に作物の上に於てのみ矛を逆まにして悪を鼓吹し、醜を奨励する態度を示すのは、ただに標準を誤まるのみならず、誤まつた標準を逆に使用して居る点に於て二重の自殺と云はれても仕方がありますまい。（229頁）

「態度」において、結論として、日本における「揮真文学」の重要性を主張するが、「揮真文学」（「客観的態度」）、「情操文学」（「主観的態度」）の両方を「双方共大切なもの」とする認識が前提にあった。この点は、「基礎」と変化はない。また「態度」において「真を描く文学」に対して「其結果他の情操と衝突しても、まあ好いとする」というように、「真」に対してやや許容的な側面を見せている点は、「基礎」の「此短所を忘れ得せしむる丈に長所が卓然としてゐない作物は、惜しいけれども文句がつきます」という考えに連なるものであろう。そして、「真」を描く文学に対する批判は、「揮真文学」「情操文学」の両種の文学の価値を認めるということからなされるのではなく、「取捨と云ふ事を廃」し、「真」を描くべきはずが、「作物の上に於てのみ矛を逆まにして悪を鼓吹し、醜を奨励する態度を示す」こと、つまりあまりに人間の「悪」や「醜」のみに注目するような傾向をとっていることに対し、標榜している「真」を描くという態度を貫徹できていないという点に向けられている。すなわち「態度」における「真」を描く文学に対する批判も、当時の「自然主義」の作家たちが「悪」や「醜」という点ばかりを描いていることに向けられており、これは「基礎」における

「真」の為に他の「理想」、つまり「美」や「善」や「壮」の「理想」を破壊しているという批判と同じ現象に向けて別の観点から述べているものと言える。

文芸の目的を、文芸家が高い「理想」を表現することで、「如何にして活きべきかの問題を解釈」して「平民に生存の意義を教へる」という、「還元的感化」を与えることであるとする「基礎」の立場からは、「真に対する理想」を標榜し、それにより他の「理想」を破壊することを、本来平等であるはずのあらゆる「理想」という前提から、批判が行われていた。一方、創作家と呼ばれる人の態度を分析し、「揮真文学」、「情操文学」とに大別して二つの態度のあり方を明らかにし、今日の日本において如何なる態度での創作が必要であるのかを述べる「態度」の立場からは、同様の現象、つまり「真」を描くあまり「悪を鼓吹し、醜を奨励」している状況を、「客観的態度」を維持できていないものとして批判していた。

つまり「基礎」、「態度」ともに、当時の日本において自然主義文学が「真に対する理想」のために他の「理想」を破壊することを、それぞれの論の立脚点から批判したものなのである。よって「基礎」から「態度」への変化を、特に「真」に対する姿勢に注目して問題にするのであれば、両評論における漱石の立脚点の変化こそ注目すべきであろう。そしてこの変化こそが、両者の結論の違いとして現れていると捉えることができると考えられる。

三　「意識」の問題について

それでは次に、重松泰雄により指摘された「意識」の問題を考察する。この重松の見解に対しては、すでに小倉脩三（「漱石におけるウィリアム・ジェームズの受容について（Ⅰ）」「漱石におけるウィリアム・ジェームズの受容について（Ⅱ）」（『夏目漱石』有精堂、平1・2）が、『坑夫』に『原理』との関わりが見られることから、「基礎」から「態度」において、『原理』から『諸相』へ変化したという指摘を批判している。本節では、「基礎」と「態度」の「意識」に対する認識に根本的な変化がないことを明らかにするため、「態度」の「意識」の考えが依然として『原理』に基づくものであることを示す。

重松が「基礎」から「態度」にかけて、『諸相』の影響により「〈選択作用〉の無条件な是認から、複雑・曖昧な――場合によっては矛盾とも言えるような――限定的容認」へと変化したと指摘する根拠を確認する。

「哲学的基礎」において、ポイントは「如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題」（傍点原文）に置かれていた。それがここでは、いうならば〈いかように連続させられるか〉の点に傾いていると言ってよい。「Ｂの価値はＢの性質のみによつて定まらない、Ｂの前に起つたＡと云ふ現象の為めに支配せられて居る」とか、「後の一歩は前の一歩の趨勢に応ずる様な調子で出て行かなければ旨く行かない」とかいった説き方は、「哲学的基礎」には

なかったもので、その点を裏書きするだろう。また後尾に近く、「全性格の描写」を論じた部分で、「吾々の世界は既に冒頭に於て述べた通り撰択の世界であります。光線にしても、音響にしても、一定の振動数以上もしくは以下のものは、見る事も聞く事も出来ない有様で御座います。性格の全部と云つた所で、全部が悉く観察され得るとは申しません」とあるのも、いっそう有力な証左となるだろう。この講演での「撰択」は、「哲学的基礎」のそれに比べて、はるかに〈受動〉的な選択なのである。

ここで重松が「態度」において「意識」の選択が「限定的」であるとする根拠は二つ。一つは、「基礎」において「意識」の選択により「如何なる内容の意識を如何なる順序に連続させるかの問題」が強調されていたのに対し、「態度」では、意識の進行が「Bの前に起つたAと云ふ現象の為めに支配せられて居る」といった、前の現象により影響を受けることが強調されている点である。もう一つは、「意識」の選択が「光線」や「音響」のように「一定の振動数以上もしくは以下のもの」は「意識」に入ることができないというように、制限されたものとされている点である。まず前者の根拠とされるのは「態度」の次の部分である。

凡ての心的現象は過程であるからして、Bと云ふ現象は、Aと云ふ現象に次いで起るのは勿論であります。従つてBの価値はBの性質のみによつて定まらない、Bの前に起つたAと云ふ現象の為めに支配せられて居る事も勿論であります。腹が減るといふ現象が心に起ればこそ飯が旨いと云ふ現象が次いで起るので、必ずしも料理が上等だから旨かつたと許りは断言出来にくいのであります。そこで吾々はAと云ふ現象を心裡に認めると、之に次いで起るべきBに就ては、其性質やら、強度やら、色々な条件について出来得る限りの撰択をする、又せねばならぬ訳であります。丁度車を引いて坂を下り掛けた様なもので前の一歩は後の一歩を支配する。後の一歩は前の一歩の趨勢に応ずる様な調子で出て行かなければ旨く行かない。（164頁）

しかしここで重松が論拠とする、「態度」において初めて見られるとされるこのような「意識」のありようは、すでに『原理』において説かれている。まず「Bの価値はBの性質のみによつて定まらない、Bの前に起つたAと云ふ現象の為めに支配せられて居る」という点であるが、これに関して『原理』「意識の流れ（The stream of thought）」において、「意識が絶えず変化して居る」ことを説明した部分に、次のようにある[4]。

We feel things differently according as we are sleepy or awake, hungry or full, fresh or tired [...] When the identical fact recurs, we must think of it in a fresh manner, see it under a somewhat different angle, apprehend it in different relations from those in which it last appeared. And the thought by which we cognize it is the thought of it-in-those-relations, a thought suffused with the consciousness of all that dim context. Often we are ourselves struck at the strange differences in our successive views of the

same thing. […] the young girls that brought an aura of infinity, at present hardly distinguishable existences.（p.232-233）

〔私たちは眠たいか醒めているか、空腹か満腹か、元気か疲れているかによって、物事を違うように感じる。（中略）同一の事実が二度起つた時、私たちは、新しい方法で考え、いくらか違う角度から捉え、以前とは異なる関係の中で理解せざるを得ない。それを認識する時の考えは、それがそのような関係の中にあるものとしての考えであり、全ての漠然とした前後関係の意識に覆われた考えである。私たちはしばしば、同じものについての前の見解と後の見解が不思議なほど違うことに驚いてしまう。（中略）無限の輝きを感じていた少女が、現在はいるのかいないのかもわからなくなってしまう。〕

これは「意識」が絶えず変化をすることを示すために、物事の認識がその時の環境により変化することを述べたものである。その中で「それがそのような関係の中にあるものとしての考えであり、全ての漠然とした前後関係の意識に覆われた考え」として、ある「意識」が前後の「意識」のあり方と密接な関連にあることが説かれている。また先の「態度」の引用に「腹が減るといふ現象が心に起ればこそ飯が旨いと云ふ現象が次いで起る」という例があるが、これは『原理』の「空腹か満腹か」によって、その認識のあり方が変わるということと同じものと言える。また「態度」の先の引用の後には、「昔し恋をした女を十年立つて考へると、なぜまあ、あれ程逆上られたものかなあと感心するが、当時は其逆上が尤もで、理の当然で、実に自然で、絶対に価値のある事としか思はれなかつた」という例が出されるが、これもまた、『原理』にある例と同様のものである。

また「態度」の「後の一歩は前の一歩の趨勢に応ずる様な調子で出て行かなければ旨く行かない」という記述も、『原理』の次の部分に対応したものである。

Now any thought the quality of whose fringe lets us feel ourselves 'all right,' is an acceptable member of our thinking, whatever kind of thought it may otherwise be. Provided we only feel it to have a place in the scheme of relations in which the interesting topic also lies, that is quite sufficient to make of it a relevant and appropriate portion of our train of ideas.（p.259-260）

〔どのような考えであれ、その周縁部が「よい」と感じさせるような性質のものであれば、それがどのような種類の考えであったとしても、私たちの思考の中に取り入れられる。ある考えが関心のあるテーマの関係系統の中にあると感じられるならば、観念の流れと関連した適当な一部として取り入れるのに全く十分なのである。〕

このように『原理』においても新しい考えが、それまでの思考の進行に対して適切なものかどうかによって受け入れられたり、退けられたりすることが述べられている。

さらに重松が「有力な証左」として指摘する「態度」の「光線にしても、音響にしても、一定の振動数以上もしくは以下の

ものは、見る事も聞く事も出来ない」という点も『原理』に見ることができる。同様に「意識の流れ」の次の部分である。

To begin at the bottom, what are our very senses themselves but organs of selection? Out of the infinite chaos of movements, of which physics teaches us that the outer world consists, each sense-organ picks out those which fall within certain limits of velocity. To these it responds, but ignores the rest as completely as if they did not exist.（p.284）

〔最も簡単な所から始めれば、私たちの感覚そのものが選択器官に他ならないのではないか。物理学が教えるには、外的世界は無限の混沌とした運動により成り立っており、その中から、各感覚器官はある一定限度の速度の範囲にあるものを取り入れている。そしてそれらには反応するが、残りのものはまるでないかのごとく完全に無視するのである。〕

このようにすでに『原理』において、感覚器官の選択の問題、その認識が「一定限度の速度の範囲にあるもの」と限界があることが述べられている。そもそも漱石は、「基礎」ですでに「ある程度の自由がない以上は、又幾分か選択の余裕がないならば」（傍線藤本　以下同）と述べており、「選択」という問題において「曖昧」「限定的」であったと言える。

さらに「態度」において依然として『原理』を基礎としていたことは、「態度」の主題である創作家の態度について説明した次の部分の類似からも裏付けられる。

さうして此取捨は我々の注意（故意もしくは自然の）に伴つて決せられるのでありますから、此注意の向き案排もしくは向け具合が即ち態度であると申しても差支なからうと思ひます。（注意そのものゝ性質や発達は茲には述べません）私が先年倫敦に居つた時、此間亡くなられた浅井先生と市中を歩いた事があります。其時浅井先生はどの町へ出ても、どの建物を見ても、あれは好い色だ、これは好い色だ、と、とう〳〵家へ帰る迄色尽しで御仕舞になりました。流石画伯丈あつて、違つたものだ、先生は色で世界が出来上がつてると考へてるんだなと大に悟りました。（184－185頁）

漱石はこの後、ロンドンの下宿で往来を歩くと匙を必ず拾って来る老人がいたが、実際自分が往来を探してみても匙が全く見つからなかったという話をし、同じようなことをしても態度によってそれぞれの「経験」が全く異なることを述べる。これは『原理』の次の点に基づくものであろう。

A man's empirical thought depends on the things he has experienced, but what these shall be is to a large extent determined by his habits of attention. A thing may be present to him a thousand times, but if he persistently fails to notice it, it cannot be said to enter into his experience. […] Each has selected, out of the same mass of presented objects, those which suited his private interest and has made his experience thereby.（p.286-287）

〔人の経験的な考えは経験した物事によるが、それらがどのようなものになるのかは、ほとんど注意の習慣によって決まるのである。あるものが百遍繰り返して目前に現れて

も、終始これを気にとめなかったら、経験に入ったとは言えない。（中略）それぞれの者が同じく目前に現れた膨大なものの中から、自らの興味に合うものを選択し、そのことによりそれぞれの経験を形成するのである。〕

略した部分では、四人の人間がヨーロッパ旅行をした際、一人は服装や色彩、公園、風景、建物、絵画、彫刻などの印象を持ち帰るが、他の一人の印象は距離や物価、人口などの実用的な統計によって占められ、他の一人は劇場やレストラン、娯楽場の印象ばかりであり、最後の一人は全く異なり主観的にばかり考えているという例が述べられている。そしてここで述べられる「それぞれの経験を形成する」「注意の習慣」こそ漱石が「態度」で問題にする主要なテーマであると言える。その他いくつかの点で「態度」で述べられる「意識」の見解と『原理』の記述とを対応させることができる。「態度」の「意識」についての認識は『原理』を基礎としたものと考えるべきである[15]。

最後に「「自由意思」否定の「揮真文学」を積極的に容認する「創作家の態度」」という重松のもう一つの指摘について検討する。それは「態度」の次の部分に注目したものと思われる。

こゝ迄来て、気が付いて見ると、客観、主観両方面の文学には妙な差違が籠つて居ります。純乎として真のみをあとづけ様とする文学に在つては、人間の自由意思を否定して居ります。（中略）層々発展して来る因果の纏綿は皆自然の法則によつて出来たものと見なければなりません。（中略）所が情操を本位とする文学になると、好悪があり、評価があるんだから、篇中人物の行為は自由意志で発現されたものと判じてかゝらなければならない。

ここで述べられているのは、物事を見るときの態度の違いであり、それを「真」としてあとづけようとするときは、それが「因果」によるもので、「自由意思」を否定することになるが、同じものを「情操」を本位として、「自由意思」によるものとして見ることもできるということである。ここでは、重松が指摘するような漱石が「意識の選択作用」を認めるか否かの問題ではなく、ある現象を「客観的」（＝「因果」によるもの）とも「主観的」（＝「自由意思」によるもの）ともどちらにも捉えることができることを述べているのだ。このように見るものの態度により同一の現象がどちらにもとれることを、「態度」で「経験に対する注意の向け方即ち態度一つで、かう両面に分解出来」るとして説明している。その上で、現状の日本においては、行為を因果関係によって見る「揮真文学」が必要であると説くのである。

以上、「態度」の「意識」の認識が、「基礎」と同じく『原理』をもとにしたものであることを確認した。両者において漱石は基本的に同じ立場と言え、その差異の原因を「意識」の認識に見ることはできないと考えられる。

四　「基礎」と「態度」の関係性について

両評論において「真」に対する姿勢についても、「意識」の

問題についても決定的な違いがないことを確認した。両者において漱石の基本的な認識に変化はないのである。このことは「基礎」において結論として主張される「還元的感化」と、「態度」における「情操文学」の役割の類似性からも裏づけることができる。「基礎」の「還元的感化」は、次のように説明される。

文芸が極致に達したときに、之に接するものは、もし之に接し得る丈の機縁が熟して居れば、還元的感化を受けます。此還元的感化は文芸が吾人に与へ得る至大至高の感化であります。機縁が熟すと云ふ意味は、此極致文芸のうちにあらはれたる理想と、自己の理想とが契合する場合か、もしくは之に引つけられたる自己の理想が、新しき点に於て、深き点に於て、もしくは広き点に於て、啓発を受くる刹那に大悟する場合を云ふのであります。（第二十五回）

次に「態度」の「情操文学」を説明した部分である。

著書の趣味が深厚博大であればある程、深厚博大の趣味があらはれる訳になりますから、えらい人が此種の文学をかいて、えらい人の人格に感化を受けたいと云ふ人が出て来て、双方がぴたり合へば、深厚博大の趣味が波動的に伝つて行つて、一篇の著書も大いなる影響を与へる事ができます。（231頁）

前者の「もし之に接し得る丈の機縁が熟して居れば」というのは、後者の「えらい人の人格に感化を受けたいと云ふ人が出て来て、双方がぴたり合へば」というところとほぼ同じ意味であり、また前者の「自己の理想が、新しき点に於て、深き点に於て、もしくは広き点に於て、啓発を受くる刹那に大悟する」というのは後者の「深厚博大の趣味が波動的に伝つて行つて」というところとほぼ同じ意味として捉えられる。「基礎」における「還元的感化」と「態度」における「情操文学」の効果として述べられていることは極めて近いものと言える。ただし、「基礎」においては「真に対する理想」を含む「四つの理想」がすべて平等なものとされた上で「還元的感化」が主張されていることから、「基礎」の「還元的感化」には、「態度」における「状態の変化を知らせる」という「揮真文学」の役割も含まれていると見ることができる。

つまり「基礎」で「四種の理想」による「還元的感化」が主張され、その上で、「態度」において「四種の理想」の中から「真に対する理想」の文芸、つまり「揮真文学」の役割が当時の日本の現状分析をもとに強調されていると言える。両者の関係は、「基礎」を土台として「態度」で現在必要とされる文学を主張するという、連続的なものとして捉えられるのである。

しかし一方で、この問題の大本である『虞美人草』以前と『坑夫』、『三四郎』以後の作品の違いは瞭然である。相原の指摘するように、「基礎」が『虞美人草』以前に、「態度」が『坑夫』以後に関連していると考えられることから、両者の差異を無視することはできない。

それでは、二つの評論の差異に何を見るかという点であるが、ここで平岡敏夫（「『虞美人草』から『坑夫』『三四郎』へ」（『漱石序説』塙書房、昭和51・10）の指摘を参照したい。ここで平岡は、越智

治雄（「『三四郎』の青春」（『漱石私論』角川書店、昭46・6）の『坑夫』、『三四郎』を「疑いもなく漱石はこの二作において外界と内界が異様に在来の秩序を失ってみえ始めるところを、とらえている」とする指摘を「十分首肯できる」とした上で、漱石は「文明」に対して「固定的イメージを持っていたわけではなかった」としつつ、この『虞美人草』から『坑夫』の変化について「現実（文明）の変化進行が漱石（の文明批評）をして新しい方法を自覚せしめるに至った」と述べる。越智の「在来の秩序を失ってみえ始めるところ」を平岡は「現実（文明）の変化進行」と述べるが、共通するのは漱石がこの時期に社会的な変化を極めて強く意識していたという指摘である。そしてこの点は、「態度」の主張からも確認できる。

漱石は「態度」において「情操文学の目的は情操を維持し、啓発し、又向上化するにある」ものとし、その例として「孝」を挙げて説明する。「孝と云ふ情操の評価」が変化したにもかかわらず、以前と同様の評価を与えて評価するなら「時勢後れ」になることを述べ、その上で次のように続ける。

こう云ふ風に評価が変つて行くのはつまる所、前に云つた社会状態の変化に基いた結果に外ならんのでありますから、此状態の変化を知りさえすれば、旧来の評価を墨守する必要がなくなります。之を知らねばこそ煩悶が起つたり矛盾が起つたりして苦しむのであります。かう云ふ時に誰か眼の明きらかな人が、此状態の変化を知らせる、――即ち客観的に叙述すれば、読者ははあ成程と思ふので、大変な解脱になります。（237頁）

ここで漱石は「揮真文学」を「社会状態の変化」を「知らせる」という意義のもとに捉えている。そして今日の日本では、「社会状態の変化」から「旧来の評価」が変化している、つまり様々な価値観が激しく変わっているため、「此状態の変化を知らせる」「揮真文学」こそが重要であるとしている。つまり、「態度」における「情操文学」に比較しての「揮真文学」の重要性の主張の背景には、このような当時の日本における「社会状態の変化」の激しさ、そしてそれによる価値観の変化があったのである。このような変化こそが、先の二氏の指摘である「現実（文明）の変化進行」、「在来の秩序を失って」いることの具体的な様相と考えることができるのではないか。

つまり、「基礎」から「態度」における、「真」に対する立脚点の違いの背景には、このような日本の社会状態の変化、特に従来の道徳的な価値観の変化という問題への認識があった。そしてこの認識から、「真」を描く文学の意義、「眼の明きらかな人が、此状態の変化を知らせる」という役割が必要とされたのである。このことは本稿第二節で指摘した、「基礎」と「態度」における「真」に対する認識が、「基礎」では「あらかじめ吾人の予想した因果律と一致する」という描き方が一定の評価を与えられていたことに対し、「態度」では低い評価を与えられていたこととも関連するものと言える。

五　「基礎」におけるイプセンの影響

以上のように「基礎」と「態度」の関係をまとめた上で、最後にそれぞれにおけるイプセンの影響を明らかにする。

拙稿「漱石のイプセン受容をめぐって」（前出）において、漱石のイプセン受容は明治四十年頃を境に二つに分けることができること、その時期を前後としてイプセンに対する発言に変化が見られることを指摘した。これはちょうど、「基礎」と「態度」の違いに併行するものと言える。

「基礎」において漱石は、高い「理想」を有した文芸家が作物を通して「還元的感化」を与えることを文芸の目的としていた。ここで漱石はこのような文芸家のあり方を「尤も深き理想を実現する人を、深刻に人世に触れた人と申します」（第二十五回）というように、「人世に触れる」という言葉で説明している。

この「人世に触れる」という言葉は、「『鶏頭』序」（『東京朝日新聞』明40・12・23）において「触れる」として同様の意味で使われており、そのような文芸家の代表者としてイプセンの名前が挙げられている。ここで漱石は、小説を「余裕のある小説」と「余裕のない小説」とに分け、虚子の『鶏頭』を「余裕のある小説」として評価する一方、「余裕のない小説」に関して次のように述べる。

たとへばイブセンの脚本を小説に直した様なものを云ふのである。大いに触れたものを云ふのである。所謂イブセンの書いたもの抔は先ず吾人の一生の浮沈に関する様な非常な大問題をつらまへて来て其問題の解決がしてある。しかも其解決が普通の我々が解決する様な月並でなくつてへえと驚ろく様な解決をさせる事がある。人は之を称して第一義の道念に触れるとも、人生の根元に徹するとも評して居る。

「第一義の道念に触れる」、「人生の根元に徹する」といった意味での漱石のイプセン観は、次の明治三十九年十月二十六日付の鈴木三重吉に宛てた書簡とつながるものと言える。

只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅少な部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイプセン流に出なくてはいけない。

この書簡の「イプセン流」という言葉に見られるような漱石とイプセンの親和性の背景については、すでに拙稿「『野分』成立の一側面」（『近代文学論集』平21・11）で考察した。イプセン「人民の敵」（*An Enemy of the society*）[6]のストックマンの演説部分、「はるかに遠くまで進ん」だ少数が、「決して追いつくことができない」大多数に対して、「この世に生まれたばかりの真実のために戦う」という構図が、『文学論』（大倉書店、明40・5）「第五編　集合的F」の「天才的意識」と「模擬的意識」の関係、一時代の「集合意識」の形成において先駆的役割を果たす「天才的意識」と周りを模倣して後からついてくる「模擬的意識」のあり方に対応していることが、漱石の感じていた親和性の根底にあることを指摘した。「基礎」において、文芸家が「新し

い理想」「深き理想」「広き理想」を実現する人であり、周囲の人々に「還元的感化」を与える存在とされるのは、『文学論』の「集合的F」の考えに基づくものと言える。つまり「人間としても尤も高く且つ尤も広き理想を有した」文芸家が、「如何にして活きべきかの問題を解釈して」「平民に生存の意義を教へる」という「還元的感化」を与えるものとする「基礎」の主張の根底には、イプセン受容による文芸家像の形成があったのである。

六　「態度」におけるイプセンの影響

本稿第四節で、漱石が「態度」において、「揮真文学」の必要性を説いたのは当時の日本における「社会状態の変化」の激しさと、それによって「旧来の評価を墨守する必要がなくなったという価値観の変化が背景にあることを指摘した。その上で漱石は、今日の文芸の課題として、「今迄の小説や戯曲にあらはれたよりも遙かに種ゝな形相」を含んだ「全性格の描写」や「心理状態の解剖」ということを挙げている。このような社会状態の変化への関心が、「全性格の描写」や「心理状態の解剖」という具体的な課題につながる点に、イプセンの受容の影響が見られると考えられる。

この点で注目したいのが、談話「愛読せる外国の小説戯曲」（「趣味」明41・1）である。この談話ではまず、メーテルリンク（M.Maeterlinck）の戯曲論（「近代の戯曲（The Modern Drama）」）の内容が紹介される。それは、近代劇がかつてのような詩的装飾を失ってしまったかわりに道徳問題を扱うようになったことを述べた上で、多くの劇においては扱われる道徳問題が最初から解決済みのものばかりであるが、イプセンは「意識の奥」へ「構はず切り込んで先へ進」むことによって、「意識の尤も明らかに進んだ人物」を描いたとする。そのようなイプセン作品の人物は「俗流」の義務とするところを「義務とするに足らぬ義務」と見抜く存在であり、それによりイプセンは「吾人を人間意識の甚深の急所迄連れ込んで行く」と述べる。このような紹介の後で、漱石はこのメーテルリンクの劇評を「大変面白い」と評価する。すでに拙稿「漱石のイプセン受容をめぐって」（前出）でも指摘したが、道徳問題が「意識の奥」へ「切り込んで」行く、つまり「心理状態の解剖」という問題につながるという点が「態度」の問題意識と共通していると言える。

さらに「態度」との関係という観点からこの談話で注目したいのは、『ヘッダ・ガブラー』（*Hedda Gabler*）の主人公であるヘッダの扱いの変化である。「基礎」では、「ヘダ・ガブレルと云ふ女は何の不足もないのに、人を欺いたり、苦しめたり、馬鹿にしたり、ひどい真似をやる、徹頭徹尾不愉快な女」（第十八回）と述べられており、ヘッダの理解不可能な行動が「不愉快」という言葉で括られている。しかし、この「愛読せる外国の小説戯曲」では、「約束的な解決以上に道徳問題の解釈の方法があると云ふ教訓を与へる」が、「考へると馬鹿気た気狂染みた人間」の代表例としてとして「ヘッダ・ガブラ」の名前が挙がっ

ており、ヘッダの理解不可能な行動、一見狂気とも思われる行動に新たな意味を見出している。

このような評価の変化は「近代の戯曲」のこの部分に関係が深いものと思われる[7]。

Again, this *enlightened consciousness* will yield to infinitely fewer laws, admit infinitely fewer doubtful or harmful duties. There is, one may say, scarcely a falsehood or error, a prejudice, half-truth or convention, that is not capable of assuming, that dose not actually assume, when the occasion presents itself, the form of a duty in an uncertain consciousness. It is thus that honour, in the chivalrous, conjugal sense of the word（I refer to the honour of the husband, which is supposed to suffer by the infidelity of the wife）, that revenge, a kind of morbid prudishness, pride, vanity, piety to certain gods, and a thousand other illusions, have been, and still remain, the unquenchable source of a multitude of duties that are regarded as absolutely sacred, absolutely incontrovertible, by *a vast number of inferior consciousnesses*.(p.106-107、イタリック体　藤本)

〔この賢明な意識は、法律に屈すること、虚偽や有害な義務を認めるはほぼない。虚言や間違い、偏見、一部しか真実でないもの、因習など、ある状況においてぼんやりとした意識をもつ人々に義務と感じられるようなものは、受け入れることはできないし、実際に受け入れることがないものであり、ほとんど存在していないとも言える。言葉としては婚姻的な意味での騎士道の名誉（これは妻の不貞により傷つけられる夫の名誉のようなものである）、復讐、病的な貞操、誇り、虚栄、特定の神への哀情、これらは大多数の劣等な意識によって完全に神聖視され、全く議論の余地のないものとされる多くの義務の絶えることのない源であったし、いまだに存在し続けている。〕

「愛読せる外国の小説戯曲」の「約束的な解決以上に道徳問題の解釈の方法があると云ふ教訓を与へる」というのは、「ぼんやりとした意識をもつ人々に義務と感じられるようなものは、受け入れることはできないし、実際に受け入れることがないものであり、ほとんど存在していない」という点と関連するものであろう。ここでは、「賢明な意識」が、「大多数の劣等な意識」が義務とするようなものを義務と考えないことが述べられている。この部分には、本稿第五節で確認した進んだ少数と遅れてくる大多数という構図と同様のものが見られる。つまり先の構図を維持したまま、進んだ少数が「義務とするに足らぬ義務」を見抜く存在とされているのである。さらに「愛読せる外国の小説戯曲」でヘッダについて次のようにも述べられている。

早い話がヘツダ、ガブラなんて女は日本に到底居やしない。日本は愚か、イプセンの生れた所にだつてゐる気づかいはない。それだからイプセン劇になるのである。只こんな底抜をつらまへて来てさも生きて居る様に、隣に住んでゐる様に、自分と交際して居る様にかくのがイブセンの芸術家

たる所、一大巨匠たる所以である。

ここで「ヘッダ」が現実の世界には存在しないであろうという意味での現実性のなさが述べられている。これはイプセンの劇を「泣けない」とした談話「近作小説二三に就て」（「新小説」明41・6）につながるものと言える。

或る解釈からいへば、渠の作は其社会的哲学の具体的表現に過ない。而して其哲理は中々に意味がある。また尤もである。或は俗流より一歩も二歩も先に出て居るともいはれる。然れども其哲理が情操化されて居らない。従つて此哲理に由つて行動する人物が躍然として出ても、尤もだとは思はれても、行動が無理はない位までは行けても、新しい位迄は感心されても、急に故い世界から組織の異つた世の中へ出た様な気持ちがしても、――どうも泣けない。其泣けないのは篇中の人物の実行する主義道徳が未だ一般に情操化されて居らない。

漱石はイプセンの作る人物の現実性のなさに、「篇中の人物の実行する主義道徳が未だ一般に情操化されて居らない」という問題を見る。この発言は時に漱石のイプセン作品に対する批判として読まれるが、果たしてそうであろうか。漱石はイプセンの描く人物について、「情操」としてはついていけないが、一方で「尤もだ」、「行動が無理はない」と「知」においては納得することを述べる。これは「愛読せる外国の小説戯曲」で「さも生きて居る様に」描くというイプセン作品に対する評価とあわせて、「田山花袋君に答ふ」（「国民新聞」明41・11）で「拵へものを苦にせらるゝよりも、活きて居るとしか思へぬ人間や、自然としか思へぬ脚色を拵へる方を苦心したら、どうだろう」と述べた主張につながるものと言える。つまり、「主義道徳が未だ一般に情操化されて居らない」というのは、道徳問題におけるイプセン作品の先駆性を認める発言と言えるのではないか。

『文学論』において「天才的意識」と「模擬的意識」の差異を「内容の質にあらずして其先後なり」（第五編　第一章）と、「天才的意識」の時代の先駆性が強調されていた。このような道徳問題における先駆性をイプセン作品に見ていたと言える。そしてそのような道徳問題における先駆的な「意識」を持つ人物を、「尤もだ」「行動が無理はない」として「知」に訴えるように描く文芸のあり方は、「態度」において主張される「揮真文学」が、「客観的関係を明めるにつけて出る」ような「はあ成程」という「感心」でできあがること、それにより社会状態の変化を知らせる役割を担うことに繋がるものである。そしてそのような先駆的な人物を描く上で必要とされたのが「意識の奥」へ「切り込んで先へ進」むことなのだ。「真」を描くことで世の中の価値観の変化を知らせる、そのために「心理状態の解剖」や「全性格の描写」を文芸の役割とする漱石の文学観の形成において、イプセン受容は大きな意義があったと言える。

以上、「基礎」、「態度」ともに漱石の文学活動において、イプセンの影響がきわめて重要なものであることを見てきた。今後、具体的な作品に対するイプセンの影響について、稿を改めて論じたいと思う。

【注記】

1　本稿において、漱石のイプセン作品の受容の問題を考える上で、イプセンの作品のみでなく、イプセンについて書かれた評論なども含めて考察する。よって「イプセンとの関係」や「イプセン受容」などの「イプセン」はそれらを含めた言葉である。また、「イプセンに関する発言」のように実際のイプセンに近い意味のものについても「イプセン」と表記するが、本稿においてそれぞれの「イプセン」の意味を細かく分けて考える必要性が薄いと考え、表記上の区別をしていない。

2　漱石の文章のうち「東京朝日新聞」に発表されたものは、基本的に同時期、もしくはほぼ同時期に「大阪朝日新聞」にも掲載されているが、本稿では便宜のため、「大阪朝日新聞」の書誌情報は省略する。

3　「態度」は分割されていないので、便宜のため引用に使用した『漱石全集　第十六巻』の頁数を表記する。

4　本稿での『心理学原理』の引用は、*The Principles of Psychology*. New Yorkcosimo. 2007.による。引用の後の頁数は同書のものである。ちなみに漱石旧蔵書のものは、*The Principles of Psychology*. London:Macmillan & Co. 1901.である。また訳文は*The Principles of Psychology*の簡略版*Psychology, briefer course*を訳した『心理学』（今田恵訳、岩波書店、昭和14・7）を参照した拙訳である。

5　本稿は重松の「態度」における「意識」の認識を『諸相』と結びつける考えを批判するものであり、重松が同論文で主張する『諸相』の「潜在意識」の問題と『坑夫』の「潜伏者」の問題、また重松が一貫して追究する漱石作品の「潜在意識」の問題とのつながりを否定するものでないことは断っておく。

6　「人民の敵」を漱石が読んだのは留学時期と考えられる（拙稿「漱石のイプセン受容をめぐって」（前出）参照）。

7　本稿での「近代の戯曲」の引用は、*The Double Garden*. Translated by Alexander Teixeira de Mattos. London:George Allen. 1904. 所収の"The Modern Drama"による。漱石旧蔵書と同じものである。この「近代の戯曲」は当時翻訳されている。（平野万里訳「近代の戯曲」（「明星」明39・6）、相馬御風訳「メーテルリンクの『近代戯曲論』」（「早稲田文学」明40・11））。訳文は、これらのものを参照した拙訳である。邦題は平野のものによった。

※　漱石の作品、評論、書簡、談話等の引用は、全て岩波書店最新版の『漱石全集』（岩波書店、平5・12―平16・10）からのものである。本稿におけるイプセン作品の英題は、漱石旧蔵書のものによった。また邦題は『世界文学大事典　第一巻』（全六冊、集英社、平成8・10）の毛利三彌執筆「イプセン」の項目のものによった。引用文において、原文にあった振り仮名や傍点、英文のイタリック体などは特に断りが無いものの他は省いている。また論文の副題を割愛した。

（近畿大学非常勤講師）